

2018 年度8月 加古川 ツバメのねぐら入り 定例観察会報告

日 時	2018年8月1日(水) 17:30~19:30			記録者: 熊谷信哉
探 鳥 地	高砂市~加古川市 加古川左岸河口のアシ原			
参 加 人 数	在校生 15名	顧 問 2名	総計 26名	天候: 晴れ
	グループ「わ」8名	相談役 1名		
観 察 概 要	<p>夕刻とはいえ、強烈な酷暑の中で、ツバメのねぐらである加古川河口に向かった。今回はグループ「わ」のイベントに完全に乗せていただいた。「わ」の代表である堀池邦康さん(当クラブでは顧問)が先日の大雨の影響を事前チェックしてくださったので安心してスタートした。</p> <p>途中の 山電の鉄塔の上にはミサゴの姿。電車が猛スピードで通過しても全く動じない。見事に都会での生活に適應している。</p> <p>堤防に座り、夕焼けに染まる西空を眺めていると、ツバメの数が徐々に増えてくる。去年と違い天敵のハヤブサの姿はない。双眼鏡で眺めると肉眼では分りにくかったツバメの群れが水面近くを飛び回り、ずっとアシ原に入っていく。「例年になく数が多い」と毎年、通っているという会員も満足げ。大半が今年、生まれた若鳥たちだ。渡りに備え、昼間は周辺でエサをついばんで体づくり。夜はアシにぶら下がり“おしゃべり”してコミュニティを形成しながら眠りにつく。人間で言えば、かつて盛んだった「若衆宿」というところか。身近に感じるツバメたちも知れば知るほど興味が沸いて面白い。</p> <p>【定例観測会で観察できた鳥】 アオサギ、イソヒヨドリ、カルガモ、カワウ、ダイサギ、チュウシャクシギ、ツバメ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、ミサゴ。 (欄外) ハッカチョウ、ハト、ユリカモメの計 13 種</p> <p>【声を聞いた鳥】 オオヨシキリ、セッカの2種 (探鳥確認メモ 春~夏バージョン)</p>			
今 後 の 予 定	<p>9月7日(金) 午後2時45分~学園祭パネル出展用の写真選定会議。和室で。 皆さん、ご自慢の野鳥写真を「L版」以上に焼いてご持参ください。</p> <p>9月22日(土) 9月定例探鳥会(甲山森林公園)。詳しいことは後日、連絡します。</p>			



ツバメの声は聞きなしの傑作 習性も巧みに織り込む



聞きなしというのは、ウグイスの「法法華経」、ホトトギスの「特許許可局」、ホオジロの「一筆啓上仕り候」などのように、鳥の声を人間の言葉に当てはめたもの。「土喰って虫喰って口渋い」と聞こえるツバメの声の聞きなしは、単に声の特徴だけでなく、ツバメの習性も巧みに織り込んでおり、聞きなし中の傑作と言える。

こんな話がある。「昔むかし、親元を離れて二人の姉妹が住んでいた。姉はツバメ、妹はスズメだった。故郷の親が危篤との知らせが入った時、妹のスズメは取るものも取りあえず、粗末な普段着のまま駆けつけて臨終に間に合ったが、姉のツバメは『よそ行き』に着替え、念入りに紅などさし、化粧してから出かけたため親の死に目に会えなかった。神様は妹の孝心を愛でて米を食べることを許し、姉には不孝の報いとして一生、土と虫を食べ暮らせ、と命じた。それ以来、ツバメは『土喰って虫喰って口渋い』と鳴いて我が身を嘆いている。米のご飯が大変、貴重だった時代の話である。『かまくら鳥とりどり』 岡田泰明著 冬花社 から引用